

特別陳列

うるし
 漆をたのしむ
 時絵・螺鈿・根来
 平成23年8月2日(火)～9月4日(日)

木に漆を塗ることは日本、中国、朝鮮半島では古くから行われてきました。金銀の粉で漆塗の器をかざる「時絵」、アワビや夜光貝など光沢のある貝を漆にはめ込む「螺鈿」、朱と黒漆塗の独特の風合が茶人によって好まれた「根来」など、多彩な器がつくられてきました。

近世の大坂は全国の漆を買い付け、漆器産地に販売する漆商いの中心地として知られています。そのため全国の産地の漆器もまた大坂に集まってきました。今回の展示では大阪市立美術館に所蔵、寄託される日本の漆器を展示します。漆を使った様々な技法、時絵であらわされた多彩な模様、近世から近代に至る日本の漆の多彩な表現をお楽しみください。



●花樹鳥獸時絵螺鈿聖龕 桃山時代(16世紀)



●【重要文化財】山水画時絵箱 江戸時代(17世紀) 大坂 宝通寺



●【国宝】菊唐草時絵手箱 南北朝時代(14世紀) 和歌山 熊野速玉大社

常設展(平常展)

■4月12日(火)～6月5日(日)

観音菩薩に出会う旅—
 西国三十三所 ア・ラ・カルト

観音信仰に基づく西国三十三所巡礼は一千年以上もの長い歴史をもち、近世以降、その札所寺院は庶民信仰の中心としてにぎわいました。彩り豊かな参詣曼荼羅をはじめ、三十三所ゆかりの仏教美術を絵画、工芸、彫刻、書跡にわたってご紹介します。



●三十三所観音曼荼羅図(部分) 鎌倉時代(13世紀) 阪草 華嚴寺

端午の節句—五月人形



5月5日、端午の節句には男の子の成長を祝い健康を祈り、五月人形をかざります。端午の節句にちなみ、江戸(東京)の人形師山川永徳斎の五月人形を中心に展示します。

●三代山川永徳斎 大将人形(五月人形) 大正(20世紀)

■4月12日(火)～7月18日(月・祝)

※6月6日(月)から6月13日(月)まで一部展示替えのため休館いたします。

根付と印籠

武士が腰に下げて用いた印籠とその滑り止めである根付は、江戸時代の技巧の粋がつくられ、多彩な主題が表されています。スイス人U.A.カザール氏が蒐集した小さな工芸の世界をお楽しみください。

小さな工芸

美術品の収集家にとって、小さな工芸品は手のひらにのせて愛玩する大切な逸品でした。本館の所蔵品、寄託品のなかから日本、中国で制作された精緻な作品を選び紹介します。

■6月14日(火)～7月18日(月・祝)

大阪の風景・大阪の画家

昭和11年に開館した大阪市立美術館には寄贈や寄託によって、たくさんの洋画が収蔵されています。これらの中から大阪ゆかり画家、大阪の風景を描いた作品を中心に展示します。



国枝金三(1886-1943) 街景I 昭和(20世紀) 本館蔵(国枝めい氏寄贈)

近世の陶磁

江戸時代の陶磁器は有田焼と京焼を中心に展開していきました。染付や色絵の磁器生産を主導した有田焼、瀟洒な色絵の陶器を生み続けた京焼。この二つの世界中心に館蔵品・寄託品の名品を展覧します。

推定住吉—「柿本人麿像」に併画される海浜風景の謎

昨年、特別展「住吉さん—住吉大社1800年の歴史と美術—」の準備に携わり、住吉をめぐる実に多種多様な主題・表現を俯瞰する機会に恵まれた。ここでは新たに一連の「柿本人麿像」に描かれる海浜風景に注目し、「和歌三神図」の創始など、「住吉絵」の周辺をめぐるいささか気になる問題を補足、整理しておきたい。

別掲「関係作例一覧」に5点の「柿本人麿像」を挙げた。いずれも委烏帽子・直衣指貫姿で上置に座す人麿像である。図像はA系、B系の二種に分類される。A系は頬、えらの張りが強調され、思案をめぐらせる壮年男性の面持ちを示す。佐竹本三十六歌仙絵の柿本人麿像を継承するタイプで、背景に梅や桜の花びらを散らす「兼房夢想系」に展開する。一方、身体の向きを反転させたB系は、顔は比較的細面で、うすすらと笑みを浮かべて夢想する老人の面持ちをみせる(写真=B系5・出雲歴博本)。その姿勢は意外にも佐竹本の山部赤人像と近く、筆をとる指の細部表現も含め強い影響が認められる。A系図像が歌想を練る最中、B系図像が今しも歌を書き付けようという瞬間、という対比もできよう。

数ある人麿像のなかで、これら5点の存在を際立たせている最大の特徴は上述の人麿図像とは全く別のところにある。つまり、A系では画面の上・下端に置かれた海浜風景、B系では人麿の頭上余白に描かれる海浜風景が問題なのだ。松が点在する優美な州浜を俯瞰した白砂青松の名所絵風景だが、5点の人麿像に併画されたこれらの海浜風景は一体何を意味するのだろうか。住吉さん展の準備終盤になって気になりだしたが、時間切れににつき手仕舞いとなった。

A系1(藤谷家本)のそれについて、画面上・下のいずれが住吉、玉津島かは不明だが、この両所を描くのではないかと、いう冷泉為人氏の指摘がある(『寛永文化のネットワーク「隔莫記」の世界』)。B系4(東山御文庫本)を写すと見られる土佐光成の人麿像粉本(京都市立芸術大学蔵・土佐派絵画資料)を類例にあげるが、海浜風景の場所特定は留保している。ともあれその見方に従えば、A系1、2については立派に「和歌三神図」の要件を備えた画像となることが了解される。とくに室町時代に上がるA系1は、その形式的な創始を考えるにあたり実に示唆に富んだ作例となろう。人麿の肖像に住吉、玉津島の名所絵を取り合わせる構成自体は、「住吉家縮図帖」(東京藝術大学大学美術館蔵)中の「和歌三神図」の存在からも、後に続く三幅対形式にその名残をとどめたとみられるふしがある。つまり

〈関係作例一覧〉

系統	NO	作品名称	筆者等	制作年代	所蔵	備考
A	1	人麿図	伝土佐光成	室町時代	藤谷家	冷泉家の至宝展 219
	2	人麿図	有朝(傳)・有朝(傳)・有朝(傳) 豊元(傳)	江戸時代	冷泉家時雨亭文庫	冷泉家の至宝展 177
	3	柿本人麿像	伝承不明	室町時代	クリーブランド美術館	東洋絵画の精華展 59
B	4	柿本人麿像並和歌	伝藤原信美(傳) 伝藤原為家(傳)	鎌倉時代	宮内庁(東山御文庫御物)	皇室の至宝 東山御物 18
	5	柿本人麿像	伝藤原信美(傳) 伝藤原為家(傳)	江戸時代	鳥取県立古代出雲歴史博物館	神々のすがた展 55

「和歌三神図」の源は、A系1のような人麿像の中に問題の海浜風景を併画するところから始まった可能性がありはしないかと考える。

ところが、B系の人麿像についての図版解説では、画中の海浜風景に住吉とする見解、明石とする見解ともあって話が複雑になる。確かに、近世の「和歌三神図」では「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島かくれゆく船をしそ思ふ」の歌意から、人麿肖像の背景には帆影、鳥影がうすすら浮かぶ明石浦風景が描かれる場合が圧倒的に多い。A系3(クリーブランド本)ではやや視点が近接するとともに、帆影や紅葉など景物が増加し、明石浦の景趣が看取できないこともない。またB系の変形で、左膝を立てる人麿像を描くセンチューミュージアム本があり、それでも背景には「明石浦遠景」が描かれるとされるから、少々気味が悪い。

人麿と住吉明神は一体視される時期もあったほど強く結びつき、中世まではしばしば対で祀られた絶対的な和歌神であった。この二柱を肖像と風景の組み合わせで一幅中に描くような粋な趣向を、B系4・5の人麿像がもっている、という風にあまり抵抗なしに思えるのは、佐竹本の人麿(肖像)・住吉明神(風景)が、もとその上巻・下巻の各巻頭に対置されたことへのリスベクトがあるせいだ。佐竹本の住吉明神はあくまで社頭風景として描かれている点でなお注意を要するかもしれないが、鎌倉時代まで上がるとされるB系4のごく単純な海浜風景が住吉と認められるならば、このような画像が、先に「和歌三神図」の創始とも考えたA系1の形式へと展開するさらなる母体となった可能性も出てくるのではないだろうか。

まず現段階では、推定住吉。さらなる手がかりを求めて、この海浜風景への検証を続けていきたい。
 (知念理
 ・当館主任学芸員)



●柿本人麿像 [所蔵・写真提供 鳥取県立古代出雲歴史博物館]